

第19回

神奈川大学高大連携協議会フォーラム



昨年12月5日、第19回神奈川大学高大連携協議会フォーラム「持続可能な未来に向けてvol.5—高校と大学をつなぐ“学び”の現在地—」(主催：神奈川大学高大連携協議会)が、同大学みなとみらいキャンパス・米田吉盛記念ホールで開催された。探究的な学びの深化や地域との協働、進学後の学修支援など、教育環境が大きく転換するなかで、高校・大学がどのように“学びの接続”を育てていくかが改めて問われている。本フォーラムは、そうした課題と可能性を共有し、実践と制度の両面から協働の方向性を探る場として位置づけられ、多くの教育関係者が参集した。講演では、教育改革の現状と高校・大学に求められる姿勢が語られ、持続可能な学びのモデルをいかに地域に根づかせていくかが議論され、県内・外の高校・大学をはじめ中学校・自治体・企業などから多くの参加者が熱心に耳を傾けた。本フォーラムに先だって行われた第45回神奈川大学高大連携協議会も併せ、変化の只中にある“いま”を見つめ、未来の学びを描く貴重な機会となった。

「学びの接続」を確かな実践へ 教育の未来を共に描くために

本日は「第19回神奈川大学高大連携協議会フォーラム」にご参集いただき、心より御礼申し上げます。今回に向けてvol.5—高校と大学をつなぐ“学び”の現在地—です。教育を取り巻く環境が大きく変化するなかで、教育現場では主体的、対話的で深い学びが一層重視され、大学には多様な背景をもつ学生の学修を的確に支え、成長へと導く体制が求められています。本学では、これらの課題



神奈川大学長
神奈川大学高大連携協議会 会長
戸田 龍介

本日の講演が、高校、大学、地域が協働し、持続可能な学びのモデルをともに築いていく契機となることを願っております。引き続き皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



講演

高校と大学をつなぐ “学び”の現在地

高校と大学が見ている「学び」の風景

高校と大学は、それぞれの「学び」をどう見ているのか。大きな教育改革が進む中、その流れが速く変わっている。高校と大学が見ている「学び」の風景は、大きく変わってきています。高校では、生徒が自分の問いを立て、調べ、考え、まとめる探究学習が広がっており、学校の学びと大学への学びの接続が図られています。一方、大学は、アドミッション・ポリシーを基盤に、求める学生像や教育課程の再設計を進めています。



株式会社社連研アド
改革支援本部 本部長
高坂 栄一氏

高校と大学の連携教育が、どの方向を目指すべきか。その核心が、スライドで示した「連携教育改革の3本柱」です。第一の柱は「カリキュラムの連携」です。これは改革の本丸であり、高校で育った探究的な学びが、大学の専門教育の入口として機能するよう、双方の学びの構造を「一本の線」として設計し直すことを目指します。高校では問いから始まる学びへの取り組みが広がるなかで、大学はその変化を理解した上で、学びの連続性をカリキュラムに表現できなければ、連携の線は断ち切れてしまいます。

その線が途中で切れてしまえば、せっかくの改革も思ったような成果を出せません。だからこそ求められているのは、高校と大学が同じ言葉で語り、同じ未来図を共有すること。学びの連続性を、この現場でつなぐ関係にある——その現場こそが本講演の出発点でした。

1989年株式会社福武書店現ベネッセコーポレーション入社。最大規模の参加者数を誇る「進研模試」を基に、主に大学の教員や研究者と連携し、教育現場に役立つ情報を提供。株式会社ベネッセ・キャリア・取組推進・教育事業本部を推進。現職では「未来模試」や「中期計画」の策定などの支援を通じて、大学の発展を願うと共に創る仕事に携わっている。近年は「高大連携・教員支援」から大学経営まで幅広いテーマで、大学の教職員を対象に研修・講演活動などをこなしている。

「学びの接続」を確かな実践へ、教育の未来を共に描くために。本日の講演が、高校、大学、地域が協働し、持続可能な学びのモデルをともに築いていく契機となることを願っております。引き続き皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

持続可能な未来に向けてvol.5—高校と大学をつなぐ“学び”の現在地—

大学が直面する現実とは何か

探究を、高校の学びの成果としてだけ捉えるのではなく、大学での専門的な学びへと続く入口として位置づけ直し、その接点を高校と大学で共有していくことが、これからの大きな課題であり、同時に大きな可能性でもあると考えています。

高校改革を受け止める大学

高校が大きく学びの在り方を変えた現在、大学も、その変化を受け止めることが、この変化を促進する鍵となります。門教育の充実に加え、アクティブラーニング※2やPBL※3などを積極的に

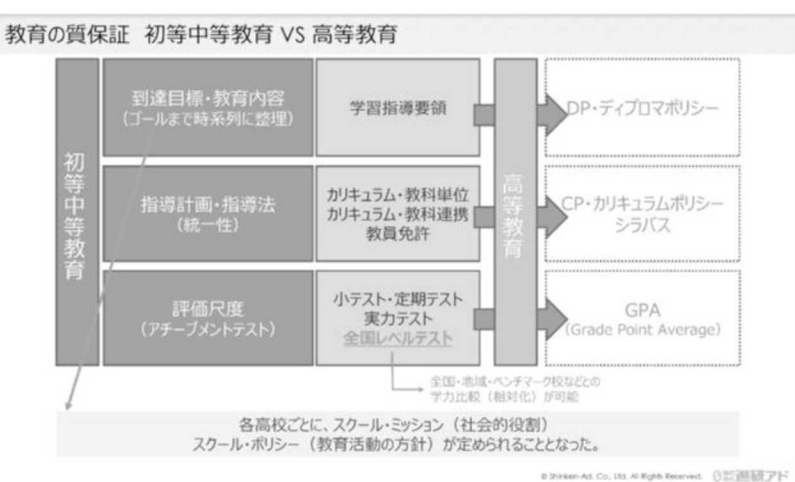
主体的な学びを生み出す環境が、今、教育現場において実現されようとしています。生徒・学生が、これからの時代を生きる力を身に付けるために高大連携が果たす役割はますます重要となる——私はそう提言します。

連携教育改革の3本柱こそがギャップを埋めるための指針。第二の柱は「相互の理解と協働」です。カリキュラムと入試の連携を支えるのは、両者の継続的な対話と協働です。高校の先生方が抱える現場のリアルを大学が理解し、大学が求める学びの姿を高校が把握する。この往復がなければ、制度を整えてもギャップは埋まりません。

今回の講演を通じて、高校と大学の「学びの現在地」をあらためて共有したかったのです。高校生が置かれている状況は確実に変わり、大学に求めている学びの姿もまた変化しています。そして、その変化は悲観すべきものではありません。彼らは本来、大きな

学生の成長を支える高大連携

「学びの現在地」をあらためて共有したかったのです。高校生が置かれている状況は確実に変わり、大学に求めている学びの姿もまた変化しています。そして、その変化は悲観すべきものではありません。彼らは本来、大きな



図表1 (初中等 vs 高等教育の質保証)：高校と大学の「質保証」の考え方の違いを整理した図。学びの基準をどうするかが高大連携の課題。

高校	視点	大学
「何を学ぶか」 「どのように学ぶか」 「何が出来るようになるか」	人材育成	「何を学び、身に付けることができたか」 学修成果の可視化
カリキュラム・マネジメント	質保証	教学マネジメント 内部質保証
社会に開かれた教育課程 総合的な探究の時間	地域連携	地域連携プラットフォーム 大学等連携推進法人
学習指導要領 (2022年度～)	改革のベース	中教審告示(2040年に向けた高等教育のグランドデザイン)

図表2 (連携教育改革の3本柱)：高校と大学が目指す改革の方向性は同じであることを示す図。学修成果の可視化や育成する力の明確化が共通点となる。

高校と大学の連携教育が、どの方向を目指すべきか。その核心が、スライドで示した「連携教育改革の3本柱」です。第一の柱は「カリキュラムの連携」です。これは改革の本丸であり、高校で育った探究的な学びが、大学の専門教育の入口として機能するよう、双方の学びの構造を「一本の線」として設計し直すことを目指します。高校では問いから始まる学びへの取り組みが広がるなかで、大学はその変化を理解した上で、学びの連続性をカリキュラムに表現できなければ、連携の線は断ち切れてしまいます。

その線が途中で切れてしまえば、せっかくの改革も思ったような成果を出せません。だからこそ求められているのは、高校と大学が同じ言葉で語り、同じ未来図を共有すること。学びの連続性を、この現場でつなぐ関係にある——その現場こそが本講演の出発点でした。

今回の講演を通じて、高校と大学の「学びの現在地」をあらためて共有したかったのです。高校生が置かれている状況は確実に変わり、大学に求めている学びの姿もまた変化しています。そして、その変化は悲観すべきものではありません。彼らは本来、大きな



図表3 (Future Skills Project 研究会：まとめ) 探究や課題解決の経験が、学ぶ意欲や将来の力につながることを示した図。主体性の重要性を象徴している。

※1 探究活動：課題の設定、調査、分析、発表までを通じて学ぶ学習プロセス。主体性や思考力を育て、大学の学びの入口ともつながる。
※2 アクティブラーニング (AL)：受け身で聞くだけの授業ではなく、生徒が議論や観察・実践を通じて能動的に学ぶ授業法。深い理解を促す。
※3 PBL (プロジェクト・ベースド・ラーニング)：実際の課題をテーマに、解決策を検討しながら学ぶ方式。探究と親和性が高く、大学の学び方改革とも重なる。